

あとがき

本書は（Ⅰ）「書の歴史について考えるために」と（Ⅱ）「歴代の名品」で構成されています。

（Ⅰ）は恩師今井凌雪先生いまいりやうせつ創刊の月刊書道誌『新書鑑』に「書の歴史〈中国篇〉」の「前説」と題して、二〇二〇年の十月号から五回にわたって連載されたものです。本書ではこのようなタイトルに改めました。この連載は、書を学びはじめた人たちや、芸術科書道の授業で学んでいる高校生にも理解してもらえようように、平易で読みやすくお願いします、という編集者の依頼に応じたものです。そのこともあり、複雑で多岐にわたる書の歴史の大きな筋だけが図式化されているにすぎません。ただし、多くの実例をふまえ、書の歴史について考えるための要点は盛り込んだつもりです。本書の核をなす（Ⅱ）のための前口上の役割を担わせようと思い、はじめに掲げました。

（Ⅱ）は星弘道先生ほしこうどう主編の月刊書道誌『龍賓』の「書の鑑賞室」という欄に、二〇〇四年の一月号から連載で執筆している記事の中から、四分の一ほどの七十回分を選んで時代順に並べたものです。本書ではタイトルを「歴代の名品」としました。ただし、必ずしも名品ばかりが登場するわけではなく、たとえば芸術科書道の教科書で扱われている名品は、全体の四割程度です。新発見の文字史料や、これまでの書道史の概説本には見られないものが多くを占めています。とくに明代や清代の作例については稀観品きこうひんを少なからず取り上げました。

書の歴史の研究は、今日に伝わる作例を総動員し、これを材料として考究の対象とする以外方法がありません。もちろん、実在した過去のすべての作例を見ることはできず、今日に伝わるものなどは、偶然によってもたらされた氷山の一角です。すでに朽ち果てて沈黙する歴史のかなたに消え去った膨大な作例の堆積を考えると、茫然たる気分になります。

私たちにできることは、今日に伝わる微小な点のごとき作例について考察し、点と点を正しい論拠で結びつけ、細いながらも実線が引けるよう努力をくりかえすことでしょう。「歴代の名品」の七十種の短文は、このような理想につながる考察までには至っていません。小さな点としての具体的作例に対する私なりのアプローチではありますが、全体を通して読み返してみると、書法そのものに対する解析が足りず、このことが反省点であることを感じています。

(Ⅱ) には、関連する事柄として、現地を訪れた際の思い出話のような記述も含まれています。これらは一九七九年秋からの北京留学時代に、春休みや夏休みの休暇を利用して各地を旅行した時の記憶をたどりながら書いたものです。この種の記述も連載時のものをそのまま収めました。分量的には決して多くはないのですが、本書の題名が「名品と珍品でたどる中国書道史紀行」となった所以でもあります。

先日、短時間でしたが、東京国立博物館の東洋館で、中国書法の名品を鑑賞する機会を得ました。当日の東洋館は中国人の旅行者も多く、家族みんなで楽しげに意見をかわしながら、書の作品

に見入っていました。小学生の女の子が大幅の前で空を仰ぐように立ち尽くし、小さな声で作品を読みながら書を追っている姿、そして、女の子に身を寄せて作品についての批評をかわす父親らしき人の姿に、心を打たれました。読みながら見るもの、としての書の鑑賞における本道を、小さな女の子に再認識させられたばかりか、ごく自然なこととして家族で書を楽しみ味わっている様子に接することができたからです。書という芸術がしっかりと世の中に根づいていて、あるいは日常生活にまで溶け込んでいそうなことをも連想させる、私にとっては貴重な時間でした。

書は古くて新しい、文字にかかわる芸術です。うつくしさ、やさしさ、たくましさ、そして近寄りがたい厳しさを感じさせる芸術でもあります。この一冊が、書を学びはじめた人たち、あるいは書はこれまで敬遠されてきた人たちに対して、そのことを伝えるための一助ともなれば幸いです。本書に収載するにあたり、(Ⅰ)(Ⅱ)を通して、連載時の誤記や誤認を改めたほか、わずかですが補足の記事を書き加えたところがあります。一知半解の臆断ばかりで、大きな誤りに気づいていないことを恐れるばかりです。読者諸賢の御批評をお願い致します。

本書を企画し、出版に尽力された大修館書店の河合洋輔氏に対して、心から御礼を申し上げます。

令和八年六月

中村伸夫